

## 亀ヶ首発射場跡

亀ヶ首射撃場は倉橋の東端にある。中世期（1185 年-1568 年）には海賊の多発で悪名高く、1895 年に帝国海軍が武器砲兵の試験場を探していた際、比較的隔離されていたことや、植物が密生していたこと、山が周囲にあることなどから、海賊と同じ理由でこの場所を選んだと考えられている。

亀ヶ首で行われた試験・開発は極秘であり、誰が使用したのか、いつ建てられたのかなどの詳細は不明である。軍事施設が置かれていたことを示す最初の文書は、日清戦争（1894 年-1895 年）直後に遡る。日露戦争（1904 年-1905 年）後に魚雷発射場や大砲などの軍備の試射場が増設されたとされるのが一般的である。また、1917 年には皇太子(後の天皇)裕仁親王（1901 年-1989 年）がこれらの施設を視察したことが記録に残されている。

第二次世界大戦(1939-1945)に至るまでの日米英の軍備競争の中で、亀ヶ首試射場は多くの新施設が追加され、急速に規模を拡大した。また、有人魚雷「回天」の訓練や毒ガス実験も行われていたことが知られている。しかし、亀ヶ首試射場の主な役割は、呉海軍工廠が生産した軍備・弾薬の試験場としての役割であった。

亀ヶ首は、史上最強の武装を誇る戦艦「大和」とその姉妹艦「武蔵」の主砲台と副砲台の試験場としても知られている。大和の主砲台は、軍艦に搭載された史上最大の 46 センチ砲 3 基の砲塔で

構成されており、軍艦に搭載された砲塔としては史上最大規模だった。海軍はこれらの兵器を船で亀ヶ首に輸送した。岸壁では200トンのガントリークレーンで吊り上げられ、実験場に運ばれた。ここでは、鉄製の装甲板の厚さを変えて貫通力を実験し、一對の電気網を使って発射して精度と銃口速度を測定した。実験中の人員を保護するために、巨大な砲からよって発生する衝撃波を封じ込めるために、3つの厚いコンクリートの防風壁が必要だった。

実験施設は島の住民からは歓迎されていなかった。「大和」の砲台の開発をめぐる秘密主義にもかかわらず、発射実験を完全に秘密にすることはできなかった。砲撃の衝撃波は、1・5キロ離れた大伯の家々の襖をガタガタにするほど強かったという。また、島の周辺海域では安全対策として漁業が禁止されていたため、経済的にも打撃を受けていた。1924年、漁民たちは実験場の場所に対する抗議運動を組織したが、失敗に終わった。

第二次世界大戦末期、日本の敗戦が明らかになると、帝国海軍は亀岳火薬庫の資料のほとんどを撤去した。試験射撃場を発見した連合軍は、施設の大部分を搜索し、最終的には破壊した。その後、戦争で困窮した地元の人々は、金属くずなどの貴重品を拾い集めた。その後数十年、実験場は放棄され、すぐに鬱蒼とした森に覆われた。

それにもかかわらず、かつての実験場の跡がまだ島に残っている。爆破された食堂跡、衝撃波測定器が入っていたコンクリート製の二重壁のバンカー、近くにあった測定所、レール式クレーンがあった石の栈橋などがある。2006年には、現在の倉橋観光ボランティアの会が、実験関連の爆発事故で命を落とした人たちを追悼するために、慰霊碑を建てた。2020年には、国は「亀ヶ首試射場」を日本遺産に指定した。